

---

# 5人の高校生活

月形 竹保

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

5人の高校生活

### 【Nコード】

N7741W

### 【作者名】

月形 竹保

### 【あらすじ】

コナンと哀を中心に始まった、5人の高校生活。

またも、クラスは分かれることもなく、仲良し5人は探偵部を始めようとするが…。

## プロローグ（前書き）

初投稿です。

一話目なので、人物紹介でほぼ終わってしまいました。  
では、ご覧ください。

## プロローグ

新一からコナンとなって一年。  
FBIと協力し、組織は壊滅へと追い込んだ。  
しかし、哀とコナンの望んだAPT X 4869のデータは、組織によりメインコンピュータが破壊されたことで、手に入れられず、解毒剤の研究は頓挫してしまった。

そのまま、数年が経ち、帝丹高校入学式当日。

いつもの交差点に向かう二人。

「あっ！コナンくん、哀ちゃん！おはよう。」

大きな声で挨拶してくるのは、吉田歩美。人当たりのいい性格で、誰からも好かれる女の子。胸くらいまで伸ばした真っ直ぐな髪を、両耳の上でヘアピンでとめている。

黒目がちな瞳が可愛く、男子からは絶大な人気を誇っている。  
高校入試を上位の成績で突破した才媛でもある。

「おはようございます。遅いですよ。お二人共。遅刻したらどうするんですか！！」

と、呆れた顔をしながら話しかけてきたのは、円谷光彦である。

歩美の右横に立つ、長身でそばかす顔の青年。

敬語で話すのは昔から変わらず、礼儀正しいと、上級生の女子から、

絶大な人気を誇る。歩美同様、入試を上位で突破した頭脳明晰さである。

歩美の左横からは、

「おっす！おせーぞ、お前ら！！早く行こうぜ。」

と叫ぶ、小嶋元太。

ガツチリとした体躯は、中学から始めた柔道に因るものだ。

無駄の無い、しなやかな筋肉で引き締まっている。その見た目と、大らかな性格から、男女問わず下級生から人気がある。

3人に答えるように、

「よお、わりーわりー。博士が哀の制服姿を写真に撮りたいってきかなくてな。」

といったのは、古びた黒縁眼鏡を掛けた江戸川コナンだ。

容姿端麗、頭脳明晰、スポーツ万能と、三拍子揃った上に、紳士で優しいと、年齢関係なくモテ、その推理力は、警察関係者からも一目置かれる。

コナンの横を歩きながら、疲れたように、

「おはよう。全く、博士にも困ったものだわ。」と呟くのは、灰原哀。

白く透き通るような肌に、翡翠の瞳、赤茶のウェーブがかかった髪は肩口で切りそろえている。

誰もが振り返るような美貌だが、その瞳は冷めていて、人を寄せ付けようとしない。

才色兼備で、スポーツも得意。人見知りをする性格故か、クールビユーティイと言われるが、男子からの人気は高い。

## プロローグ（後書き）

何だか、分かりにくいですね。

誤字、脱字と気づいた方は、知らせていただけると有り難いです。  
次話もよろしくお願いします。

## クラス分けとこれから（前書き）

今日、2度目の投稿。  
あまり先に進まない…。

## クラス分けとこれから

帝丹高校へ向かった5人は、クラス分けの掲示板前で固まった。

「……………」

「これで10年連続同じクラスか。何か怖いな。」

「え〜？コナン君、コレはもう、奇跡だよ!!」

「そうですよ。神様が5人は分けてはいけないうって言うてるんですよ!」

「少年探偵団は不滅だな!!」

「はあっ。とりあえず、教室に行きましょう。」

哀の言葉で、教室へと向かった。

当然のように、コナンと哀は隣同士に座り、その前に、歩美を挟むように光彦と元太が座った。

入学式は滞りなく過ぎ、放課後。

5人は一緒に帰りながら、これからのことを相談することにし、通りがかったファーストフード店に入り、昼食を食べることになった。

それぞれ食べたいものを注文し、ひとまず食べてしまうことにした。みんなが食べ終わり、歩美は話を切り出した。



「ねえ、部活なんだけど、【探偵部<sup>クラブ</sup>】を立ち上げない!？」

「え?俺、柔道推薦で来てるから、柔道部に入るぞ?」

「元太君は、兼部って形を取れば大丈夫じゃないですか?」

「推薦で入った奴が兼部ってありなのか?」

「そうね、ちよつと難しいと思うわ。」

「え?そうなの!?じゃあ、どうしよう…。5人いないと部にならないのに。」

「同好会じゃダメなの?」「哀ちゃん…、だって、格好良くないんだもん。」

「だったら、同好会ってつけなきゃいいんじゃないか?」

「そうですよ。【探偵倶楽部】ってするのはどうでしょう?」

言いながら、光彦は紙とペンを取りだし、【探偵倶楽部】と書いてみせる。

「それなら格好いいかも!でも、元太君がいないんじゃない、淋しいね。」

「それについては、俺と哀で先生に掛け合ってみるよ。」

「要は、先生を言い負かせばいいのよね。歩美ちゃん、安心して。どうにかしてみせるわ。」

「わ~い。哀ちゃん、コナン君、よろしくね。」

「ところで、2人とも、高校では、2人が付き合ってること、公にするんだよね?」

「「え…?」「」

「あ〜っ!やっぱり、黙ってるつもりだったんだ。」

「いい加減、公表しちゃうばいいじゃないですか。何を躊躇ってるんですか?」

「そつだぞ。言っちゃえば、ラブレターも呼び出しも無くなるんじ

「やねーか？」

「まあ、そうなんだよな。哀、公表してもいいか？そうすれば、俺も嫉妬で狂いそうにならなくてすむだろうし。」

「コナン…。そう、そうね。私も、もう嫉妬で胸を痛めるのは辛いわ。」

「良かった。これでみんなに訊かれても、無理に誤魔化す必要ないもんね。」

「良かったです。僕たちも良心が痛まなくなります。」

「よし！明日からは訊かれたら、小2から付き合ってるぞって言うからな。」

「ああ、頼むよ。」

「よろしくね、みんな。」

## クラス分けとこれから（後書き）

読んでいただき、感謝です。

次も出来るだけ早く書けたらいいと思います。

## ガールズトーク(前書き)

女の子同士の会話は、なんだかちよつと難しい。

途中で回想シーンが入ります。

## ガールズトーク

「あつ、やべえ！俺、1時から、柔道部に顔出すんだった！！わりいけど、俺行くな。明日な。」  
と元太は急いで荷物をまとめて走っていった。

「じゃあ、解散にする？」

「そうですね。僕たちは帰りましょうか。」

「あ…、あのさ、コナン君、ちょっと哀ちゃん借りてもいいかな？」

「え？まあ、構わないけど。どうした？」

「コナン！！！」

強めに名前を呼ばれ、驚いて哀の方を見ると、節目がちに首を横に振っていた。

コナンは、

『ああ、光彦のことか。』

と一人で納得し、頷く。

そして、

「じゃあ、俺も光彦に話があるから、ここで分かれよう。哀、後でな。」

「ええ、後でね。円谷君、また明日。」

「はい、歩美ちゃん、灰原さん、また明日。」

コナンと光彦を見送って、改めて哀の方に向き直り話し出す。

「哀ちゃん、私ね、光彦君に告白しようと思うの。」

「そう。」

「うん、だって、もう待つのは疲れたもん。」

「小嶋君に1個下の彼女が出来たんだから、遠慮しないで言えばいいのに、煮え切らないのよね。」

「私も、光彦君も、同じ経験をしてるから…。」

「え？同じ経験？？」

「うん。私さ、コナン君のことが好きだったでしょ？あの頃、光彦君は、哀ちゃんが好きだったんだよ。」

「ええ、そうだったわね。」

「でも、2人が付き合い始めて、気付いたの。あれは、恋じゃなかったって。」

「恋じゃない？」

「うん。アレはね、憧れだったの。自分とは違う世界を持った人に対する憧れ。彼といれば、私も同じ世界を見れるんじゃないかってね。」

「円谷君も？」

「たぶんね。あの当時、コナン君も哀ちゃんも、すごく大人びてた。一緒に居ても、二人だけは違うものを見る気がしてたの。」

「まあ、あの頃はね…。」

「だから、2人が付き合うことにしたって聞いたとき、ショックだったけど、納得できたの。」

「あの後も、変わらず接してくれたものね。」

哀はあの日のことを思い出して、優しい笑みを浮かべていた。

~~~~~回想~~~~~

小学2年の冬。

組織壊滅の少し前、コナンは、哀に気持ちを告げた。

勿論、蘭には多少の嘘を交えて説明し、気持ちが他に向かったこと

を告げてからだ。

哀は、蘭に促され、素直な気持ちをコナンに伝えた。そうして、2人は付き合いだしたのである。

告白の翌日、学校に行く道すがら、探偵団の3人にその旨を伝えた。その時の歩美と光彦の顔は、一瞬、悲しみに沈んだが、次の瞬間には、いつもの笑顔を見せていた。

「そっかあ、やっぱりね。そんな気はしてたんだ。歩美は、2人を応援するよ！だって、2人とも同じくらい大事だもん。」

「そうですね。僕もお二人はお似合いだと思います。応援しますよ。」

「だよな！俺も、おまえら二人はくつつくと思ってたぜ。」

「みんな…、ありがとう。」

哀は少し涙ぐみながら、笑顔でお礼を言って、コナンと指を絡めた。

コナンは、そんな哀の指をしっかりと握り、

「サンキューな。」

といい、嬉しげに顔を綻ばせた。

~~~~~回想終了~~~~~

「ふふつ。思い出しちゃったね。」

言いながら、ペロツと舌を出した歩美に、

「ええ、良い思い出よ。」

と微笑み返した。

まじめな顔に戻り、

「歩美ちゃん、たぶん、コナンが今頃、円谷君に説教してるわよ。早く告白しろってね。」

「えっ!?!」

「実はね、彼には言ってあったのよ。歩美ちゃんが悩んでることを。それでね、せっついて頂戴ってお願いしておいたわ。」

「哀ちゃん…。」

「だからね、あなたから告白はしないで平気だと思っわ。」

「本当!?!ありがとう、哀ちゃん!大好き!」

「お礼は、ちゃんと告白されてからよ。」

と言うと軽くウィンクをした。

そして、2人は、軽い足取りで店を後にした。



## ガールズトーク（後書き）

如何でしたでしょうか？

自分、女なのに、ガールズトークを書くのに苦労しました。  
というか、会話自体が難しいです…。

次は、同じ時間軸で、コナンと光彦の会話です。

## 迷いと決意（前書き）

予告通り、前話の時間軸で、男の子同士の会話です。

## 迷いと決意

歩美と哀がガールズトークをしている頃、コナンは光彦を連れて、近所の公園に来ていた。

空いていたベンチに座り、真剣な表情で話し始めた。

「なあ、光彦。高校にも無事入れたしさ、そろそろケジメをつけないか？」

「何の話ですか？」

「歩美ちゃんだよ。気付いてるんだろう？歩美ちゃんが誰を好きなのか。元太だつて悟つたんだ。オメエが気付いてないはず無いよな？」

「コナン君…。そうですね。元太君は、僕を気遣つて、下級生と付き合いだしたんですよね。」

「ちよつと違うな。あれは、タイミングが良かったんだ。元太は、中学に上がる頃には、歩美ちゃんのことを諦めてたよ。オメエをせつなくするために敢えて、諦めてないフリをしてたんだ。」

「そんな…。」

「まあ、やつと気付いたんだらうな、それが逆効果だつたつて。だから、前から気になつてた後輩の告白を受け入れたんだ。」

「そうだったんですか。それなのに、僕が行動に移さないから、内心、呆れてるんでしょうね。」

「呆れてると言うよりは、怒ってるかもな。」

「僕はどうすればいいんでしょうか？」

「どうするもこうするもないだろ。明日、朝一で告白しろよ。」

「あつ、明日ですか！？心の準備が…。」

「そんなこと言つてると、歩美ちゃんがしびれ切らして、自分から告白してくるぞ？」

「それは困ります！！告白は、僕からしたいです。コナン君もそうだったんでしょう？」

「ん？俺か？ああ、俺からだよ、勿論。」  
コナンはその時のことを思い出し、遠い目をした。

~~~~~回想~~~~~

小学2年の冬、組織壊滅の少し前のこと。

その日、FBIからの連絡で、近い内に組織へ乗り込むことが決まった。

コナンの隣でそれを聞いた哀は、何かを決意したような顔で、一つのカプセルを差し出した。

「工藤君、これで、24時間だけ元に戻るわ。だから、組織との対決の前に、蘭さんに説明してあげて！そして、あなたの気持ちも彼女に伝えてあげてほしいの。勿論、事情を説明するために、私も一緒に元に戻るわ。」

「灰原…。分かった。幼児化のことと、組織の詳細については言わないで、出来るだけ真実を話そう。」

「出来るだけ早い方がいいわね。明日はどうか？日曜日だし。」

「ちよつと聞いてみるな。」

コナンは、新一の携帯と蝶ネクタイ型変声機を持ち、蘭に電話をかけた。

「あ、もしもし？蘭か？オレ。新一だよ。」

“新一！？本当に新一なの？今どこにいるのよお。”

「ああ、心配かけてすまねえな。明日、朝10時に阿笠博士の家に来れるか？話があるんだ。」

“心配なんかしてないわよ！明日の10時ね。大丈夫よ。”

「じゃあ、わりいけど、頼むな。明日、待ってるから。」  
“分かった。じゃあね。”

「平気だつてさ。何時に解毒剤飲めばいいんだ？」

「そうね、朝7時かしら。データもとりたいし。」

「じゃあ、今日は泊まるな。」

翌朝10時、約束通りに蘭は阿笠邸の門をくぐった。

出迎えた博士に挨拶をし、リビングに行くと、そこには、新一と見知らぬ美女が立っていた。

「新一！来たよ。おはよう。そちらの人は？」

「ああ、蘭、おはよう。呼び出して悪かったな。彼女は、宮野志保。今、関わってる事件の依頼人だ。」

「ふうん、毛利蘭です。よろしく！」

「…、宮野志保です。」

ペコリと頭を下げる志保。その髪はストレートだった。哀との関係を探られないようにとった対応策である。

「まあ、座ろうぜ。今、コーヒー淹れるからよ。」

「工藤君、私が淹れてくるわ。その間に説明を。」

と言い、席を立ちキッチンへと向かった。

志保がコーヒーを淹れている間に、大まかな概要は説明した。

そして、まだ解決しておらず、詳しいことは話せないことも言っておいた。

そして、志保が3人分のコーヒを入れて戻ってきたところで、  
「ねえ、新一、その事件、解決の目処が立ったから、話してくれて  
るんだよね？」

「ああ、まあな。」

「じゃあ、それが終わったら、帰ってこれるんだよね！？もう、ど  
こにも行かないんでしょ？」

「あ…、いや、もしかしたら、無事には戻って来れないかもしれね  
えんだ。」

「どういうこと？そんなに危険なの！？」

「ああ、敵は、血も涙もない犯罪組織だからな。それに…」  
言葉を濁す新一を不審に思い、蘭は先を促した。

「それに、何？」

「蘭、俺、オメエにさ、ずっと、待っていてくれて言い続けてきた  
よな？」

「うん。だから、私、ずっと待ってたんだよ。」

「ああ、分かってる。そんなこと言って待たせてたのに、俺は、も  
し、無事に帰ってきてても、オメエのそこには戻らねえ。」

「工藤君！？あなた、自分が何を言ってるかわかってるの？」

「新一…、どういうこと？」

新一は、神妙な顔をして、

「俺、宮野と行動をとにもするようになって、気付いたことがある  
んだ。」

蘭は目だけで先を促す。

「蘭に感じていた思いは、義務感から来る、庇護欲であって、愛や  
恋では無かったんだ。蘭のことは、守らなきゃいけない、大切な奴  
だと思ってた。だけど、宮野は、俺が、自分の手で守りたい、幸せ  
にしてやりたい奴なんだ。」

「貴方、何を言ってるの？それは、姉のことがあったからでしょ！  
！それこそ贖罪の気持ちじゃない。」

「いや、違うんだ。確かに、お姉さんを助けられなかったのは、今でも後悔しているさ。でも、それとこれとは違う。オメエの涙を見て、俺は決めたんだ。コイツを一生守っていくと。俺の人生をかけてでも、オメエを幸せにするってな。」

「新一…、そつか。何か、納得しちゃったな。私は大丈夫。実は、昨日ね、新出先生に告白されたの。新一を待ち続けるのも疲れちゃってね、受けようと思ってたところなの。」

「え？蘭さん？本当にそれでいいの？」

困惑した様子の志保に、いつもの笑顔を向け、

「ええ。だから、宮野さん、新一に、ちゃんと答えてあげて。」

「蘭さん、ごめんなさい。そして、ありがとう。」

志保は、涙を流しながら、蘭に頭を下げた。

そして、涙を拭い、新一へと向き直る

「工藤君、私も、初めて会ったときから、貴方が好きだったの。」

「宮野！いや、志保、俺の手でオメエを幸せにしたい。愛してる。ずっと、俺の傍にいてくれるか？」

「ええ！工藤君、私も愛してる、ずっと、傍にいるわ。」

蘭は、二人を見守り、そっと阿笠邸を後にした。

~~~~~回想終了~~~~~

「コナン君？いきなり黙り込んで、どうしたんですか？」

「あっ、いや、ちょっと思い出してな。」

「ちなみに、コナン君は、灰原さんに何て言っただけで告白したんですか？」

？」

光彦が、興味津々な様子で聞いてくるが、

「へっ、誰が教えるかよ！それは、哀だけが知ってればいいことだぜ？」

「ケチですねぇ。」

「で？告白する決心はついたか？」

「はい！頑張ります！僕も、コナン君や元太君に負けてはいられませんからね。」

二人で不敵に笑い合い、しっかりとした足取りで公園を後にした。



## 迷いと決意（後書き）

ちょっと長くなってしまいました。

回想シーンは、前話の回想の前の日の話です。

次は、光彦、いよいよ告白か！？

告白 盗み聞き(前書き)

いよいよ、光彦君の告白です！  
その時、3人は…。

## 告白 盗み聞き

公園からの帰り道、コナンは、光彦に切り出した。

「明日の朝は、お前ら2人で行けよ。そんな時に告白しろ。元太と哀には言っとくからさ。」

「登校中にですか?」

「ああ、改めて呼び出すのは勇気がいるぞ?」

「そうですね。呼び出す時点で相当緊張しますよね。」

「だから、無理矢理にでも二人きりの状況を作った方がいいだろ?」

「……はい。」

「じゃあ、明日は頑張れよ!」

「コナン君!ありがとうございます。また、明日。」

「おう、じゃあな。」

翌日、待ち合わせの少し前。

光彦はいつもの交差点に、歩美と二人きりでいた。

他の3人はというと、近くのビルの陰で身を潜めて二人を見守っていた。

「なあコナン、あいつ、本当に言えんのか?」

「大丈夫だろ?昨日、ちよっと脅しかけといたしな。」

「あら、脅し?でも、それくらいしなきゃ、動かないわよね。まったく、奥手なんだから。歩美ちゃんが可哀想だわ。」

「でもよお、こんなに離れてるんじゃ、会話聞こえねえじゃんか。」

「元太、俺を誰だと思ってんだ?ぬかりはねえよ。昨日の帰り際、光彦の襟の裏に着けといたんだ。」

不敵な笑みで、盗聴器の受信ボタンを押した。

「ふふ。悪い人ね。」

「やるなあ、コナン!流石だぜ!」

「おっ！何か喋ってるぞ。」

「おはよー。光彦君！あれ？みんなは??」

「おはようございます。歩美ちゃん。あ…、皆さん、今日は別で行くそうです。」

「え？どうして?」

「あの、そのお、実はですね、僕、歩美ちゃんに話したいことがあります。」

歩美は、内心ドキドキと期待に胸を膨らませつつ、

「な・何?」

「あの、歩きながらも良いですか？遅刻するとマズいですし。少し、緊張した面もちながらも、まずは、場を和ませようとする。」

「そうだね。遅刻はダメだよね!」

「はい。行きましょう。」

歩美を促しながら歩き出した。

その後ろを、一定の距離を保ちながら、ついていく3人。

「なかなか、切り出さないわね。」

「光彦のことだ、何て言おうか迷ってるんじゃないか?」

「なあコナン、学校まで、そんなに距離無いぞ？本当に大丈夫か?」

と、話していたその時、

「歩美ちゃん!あの、僕、歩美ちゃんのことを、好きなんです!」

「言えました。とうとう想いを伝えました。何のひねりもなかったですけど、顔もスゴく熱いんですけど、僕は、頑張りました!」

と、光彦が心の中で叫んでいると、

「…ほん…とう?光彦君、私のこと、好き…?」

歩美は、戸惑ったような、信じられ無いような気持ちで聞き返した。

「はい!本当です。ずっと歩美ちゃんを好きなんです。僕と、付き合ってもらえますか?」

歩美は、嬉しさのあまり、涙を零しながら、

「わ…たし…、私も光彦君が好き。ずっと好きなの。」

「歩美ちゃん！」

光彦は、そんな歩美を、抱きしめた。通学路だということは、最早、頭にはなかった。

あと5分で予鈴がなるという頃、見かねたコナン達が、声をかけた。

「おい、いつまでそうしてる気だ？」

「あと、5分でチャイム鳴るぞ！！」

「これで、学校中に広まるわね。」

抱き合つたまま二人の世界に入っていたため、突然のことに、二人は驚愕した。

「ええっ！！？3人も、先に行ったんじゃないの？」

「うわっ、あの、その、あ…っ！学校！！早く行きませんか！！」

恥ずかしいやら、嬉しいやらで、ごまかしきれないことに気付かない二人。その場をやり過ごそうとするが、

「まあ、詳しいことは、後で聞いわね。歩美ちゃん。」

「光彦！報告しろよ？」

「結果は分かってるけどな。」

口々に言い、3人は走っていった。

残された2人は、顔を見合わせ、微笑み合ってから、急いで後を追うべく走り出した。

「待つてよ〜！哀ちゃ〜ん。」

「待つてくださいよ！！コナン君、元太君！」

こうして、5人の高校生活は始まったのである。

**告白 盗み聞き(後書き)**

無事に告白成功!!  
次は部活かな。

## 広まる噂（前書き）

前話の直後、教室でのお話です。  
探偵団の交際宣言！！



## 広まる噂

5人が急いで教室に駆け込むと…。

帝丹中学出身者が、それぞれ多数の生徒たちに囲まれるという状況にあった。

理由はもちろん、歩美と光彦の関係についてだ。

しかし、その2人を含む『帝丹中学少年探偵団』は、あまりにも有名すぎた。

男子生徒たちは、

「あの、探偵団の天使、吉田歩美に彼氏が!？」

「ウソだ、嘘だと言ってくれ〜!！」

「俺たちの歩美ちゃんが…。」

「でも、相手は円谷か…、勝てっこない…。」

などなど、歩美ファンの男子達の嘆きと嫉妬と諦めの声が、学校中、いや、近隣の学校にも響いていた。

そして、光彦ファンの年上女子からは、

「円谷君に彼女が出来たって〜。」

「え〜?狙ってたのにい。」

「でも、あの、吉田さんでしょ!?!勝ち目くない?」

「とりあえず、フられるの覚悟であたってみようかしら…。」

など、未だ諦め切れぬざわめきが聞こえてきた。

ついでと言わんばかりに、コナンと哀の噂、元太の彼女情報も、一緒になって訊かれている。

「おいおい、流石にこれはないんじゃないかねえか？」

「そうね、でも、いいんじゃない？たまには事件以外のことで騒がれるのも。」

「そうだな！全部事実だしな！！」

「ちよつ！！元太君、そんな大きな声で！！！」

「そうだよ！元太君、そんなこと大声で言ったら…。」

「ねえねえ、さっきの話本当！？」

「円谷君と吉田さんって、付き合ってるの？」

「江戸川君と灰原さんも！？」

「小嶋君には一個下の彼女がいるって本当？？」

と、いつの間にか、5人はクラスメート達に囲まれ、矢継ぎ早に質問されていた。

「あゝ！！もう、ちよつと待て。順番に答えるから。な？」

コナンは、若干キレ気味でその場の全員に向けて言い放つ。

「まずは、歩美ちゃんと円谷君ね。」

冷静に話を進める哀に、歩美は頬を朱に染めながら、

「き…今日から、私と光彦君は付き合い始めたの。」

周りの男子へ鋭い視線を向け、

「歩美ちゃんは僕の彼女ですから！！！」

と言い、一呼吸置いて、先程より大きめな凜とした口調で、

「僕には歩美ちゃん以外考えられません！」

と言い切った。

少しざわめく生徒たちを余所に、

「言うじゃねえか、光彦！次は、コナンと灰原だな。」

と元太が次を促すと、

「ああ。俺と哀は小2の冬から付き合ってる。」

「かれこれ、7年以上になるわね。」

言いながら、2人は肩を寄せ合い、コナンは哀の腰に手を回した。

「俺には、哀しか女に見えないし、哀さえいれればいい。他はいらないから。」

コナンは皆の前で、哀に甘い言葉を囁く。  
哀は照れながらも、

「コナン、私もよ。貴方が隣に居てくれるなら、他に何もいらわないわ。」

と言り返す。

甘過ぎる言葉にあてられる者多数。

故に、コナン・哀ファンは、一瞬で諦めざるを得なかった。

あまりに美男美女過ぎて、間に割ってはいるのも、些か難しいものがあるのも、理由の一つだ。

そして、最後に、

「俺も、帝丹中の3年に彼女がいるぞ。来年、ここに入ってくる予定だ。俺も、あいつ以外眼中にないからな。」

と、元太は淡々と語った。

5人が話し終わると、友達と話し合う者、ケータイでメールを打ち始める者、どこかに電話しだす者、席につき静かに泣く者などがいた。

しかし、哀とコナン以外、誰一人として気付いていないことがあった。それは、チャイムが鳴り、担任教師が教室に入ってきていたことだった。

教師としては、注意をしようかとも思ったのだが、何とも、話しかけづらい状況だったため、つい、見守ってしまったのだ。

それがいけなかった。

ホームルームを始めるタイミングを逸してしまい、途方に暮れる羽目になったのだから。

そんな教師を見て、哀とコナンは、部活申請のための作戦を練りだしたのだった。

## 広まる噂（後書き）

これで、全校に、いや、近隣の学校中に広まったはず。  
部活申請の話は、次話に持ち越しです。

## 勧誘（前書き）

今回は、部活の勧誘がメインです。

この騒動を乗り越えれば、探偵部が立ち上げられるが…。

## 勧誘

新入生が、学校に慣れてきたある日のこと。  
2・3年生による部活への勧誘が始まった。

特に、1-Aの教室では、運動部・文化部共に激しい勧誘が行われていた。

理由は、少年探偵団の4人である。（元太は柔道部への入部が決まっているので特になし）

コナンと光彦には、サッカー部、ミステリー研究部から。

哀には科学部、ミステリー研究部、料理部から。

歩美には、テニス部、新体操部、ミステリー研究部から。

それぞれ、休み時間の度に囲まれて、勧誘されていた。

今までの、探偵団の実績を知り、ミステリー研究部はかなり本気で4人の勧誘に乗り出していた。

しかし、サッカー部も負けじと、男子2人を勧誘しようと躍起になっている。中学時代、2人はサッカー部に在籍していて、共にチームを引っ張り、大会ではそれなりの活躍を見せていたのだ。

歩美への、テニス部と新体操部からの勧誘は、どちらにも仲のいい先輩が居たのが理由だ。中学の体育祭や球技大会で、歩美の運動神経が良いのは実証されていた。

哀への科学部からの勧誘は、ある科学雑誌に載った、哀の研究論文によるものだ。

料理部は、噂で哀が毎食、自分で料理をしていると訊いたからとか。

こんな勧誘の嵐の中、3人は冷静に対応していた。

「先輩方、申し訳ないのですが、私（僕）は、新たに部活を立ち上げる予定ですので、他の部への入部は出来ません。諦めて、教室へ戻って下さい。」

と、毎回毎回繰り返すのだった。

昼休みの屋上で、5人はお昼を食べていた。

コナンは哀に、光彦は歩美に作ってもらい、元太は彼女から登校途中で受け取っている。

それぞれのお弁当を広げながら雑談していた。

しかし、突然真面目な雰囲気になり、コナンは切り出した。

「なあ、そろそろ、本気で先輩方からの勧誘をどうにかしねえと、探偵部立ち上げらんねえぞ？」

「そうね、相手するのも大変だし。何か良い案ないかしら？」

「まずは、みんな共通のミス研部からですね。歩美ちゃん、活動内容はわかりますか？」

「うん。図書室でミステリー小説を読んでも、視聴覚室でミステリー映画観てるかだつて。」

歩美は、元来の人懐こい性格で、探偵団の情報収集を担当している。

「そうか、じゃあ、簡単だな。」

「どうすんだ？」

元太は、特に迷惑はかかってないが、探偵団の一員として、協力は



惜しまない考えだ。

「ああ、ウチの蔵書の話しをすりゃいいんだ。学校の図書室程度の蔵書なら、既に読む物はないってな。」

「工藤邸の蔵書は半端じゃないものね。」

そう、コナンは、中学に上がったとき、工藤夫妻と養子縁組みをしたのだ。苗字が違うのは、皆がそれに慣れていたので、【江戸川コナン】でいると決意したからだ。

「そっか、中学の時に、みんなで読み漁ってたもんね!!」

「では、ミス研部はそれで良いとしまして、コナン君、サッカー部はどうしましょう?」

「あゝ、ウチのサッカー部ってどの位のレベルだったか?」

「地区で上位だけど、全国区じゃなかったはずよ。」

「うん、バランスはいいんだけど、決定力に欠けてるみたい。」

「2人とも、サンキュー。なら、俺たちと勝負をして、こっちが勝つたら、今後一切、関わらないって約束させるか。」

「いいですね!まず負けることはないでしょう。あ、元太君、キーパーやって貰えますか?」

「おっ!俺の出番か!?!いいぜ。任せとけ!!」

コナンは、中学のサッカー部では、実力の半分も出さずにプレーしていた。

光彦は、小学生の頃からコナンとサッカーをしていたので、自ずとレベルは高くなっていったのだ。

元太は、柔道で鍛えた瞬発力とパワーがある上、光彦同様、サッカーセンスもいつの間にか身に付いていた。

この3人なら、例え上級生相手でも負けることはないだろう。

「私の科学部と料理部は、問題ないわ。どちらもレベルが違うから。部に入る意味ないし。あの程度なら、言い負かすのは容易いわ。」  
「私の方も、大丈夫だと思う。先輩たちも、ノリで誘ってるだけだし。周りが落ち着いたら、平気のはず！」  
「そっか。じゃあ、まずは、放課後、ミス研部撃退だな！」

そこで、昼休みの終了を知らせるチャイムが鳴り、5人は教室へと戻っていった。

## 勧誘（後書き）

最近の高校には、どんな部活があるんでしょうねえ？

次回は、撃退編です！！

**撃退く文化部編く（前書き）**

サッカー部まで行き着きませんでした…。  
とりあえず、文化部編です。

## 撃退く文化部編く

放課後、元太を除く4人は、ミステリー研究部の部室の前にいた。

歩美が調べたところ、ミス研は、放課後、一旦部室に集まって、ミーティングをしてから、図書室か視聴覚かに揃って移動するらしい。したがって、ホームルームが終わって直ぐのこの時間は、部室にいるはずである。

「まずは、ココからだな。」

「上手くいくかな？」

「大丈夫よ。歩美ちゃん。彼がちゃんと言い負かすわ。」

「では皆さん、良いですか？行きますよ？」

コンコン

光彦がドアをノックした。すると、中から、

「はい、どうぞ。」

と言って、部員の山本（2年）がドアを開けながら、

「ようこそ。ミステリー研…きゅう…、あっっ!!！」

言い終わらぬ内に、驚きの叫びになった声に、

「いきなり大声を出すんじゃない！皆に迷惑だろう!!！」

と部長の北村から、怒声が飛んだが、山本はそれどころではなかった。

「あ…、ああ、た・たた探偵団!!!!！」

「えっ!? なっ何っ! まさか!!!? ちよつとどけっ!」

どもる山本を押し退け、北村部長が扉の前に来た。

「こんにちは。部長さん。」

歩美が笑顔で挨拶をする。

「やあ、君たち、やっと入部する気になってくれたんだね!!」  
満面の笑顔で北村部長は4人を歓迎した。

しかし、次の瞬間、光彦の言葉で部長以下8人の部員達は、凍りついた。

「いえ、正式にお断りするのに、一応、そちらの活動内容を知っておこうと思ひまして。」

すかさず哀は、

「今日は、何をするんですか？」

と質問を浴びせた。

いち早く、正気に戻った部員が、

「あ、えーっと、今日は、図書室で小説を読む予定だけど。」

と答えると、

「本は、図書室のを読んでるんですか？そんなに、置いてなかったと思ひましたけど。」

とコナンが再び質問をする。

「ああ、図書室のだけだよ。持ち込みは禁止にしてるんだ。盗難と

かがあると困るからね。」

「そうですか、じゃあ、やっぱり、僕達が入部することはないですね。」コナンはサラリと言い切った。

やっと先ほどの衝撃的な発言から立ち直った北村部長は、その言葉に、

「なぜ!?君だって、ホームズが好きだろう!! 図書室には全巻揃ってるよ!!」

どうにか興味を引こうと、ホームズの話しを出してみるが、

「ウチの書齋にも全巻揃ってます。僕の養父はあの、工藤優作ですよ?世界中のあらゆるミステリーを収集してます。僕がまだ読んでいないのは、原文で書かれてるものだけです。まあ、それも、もう、そんなにないですけどね。そんな、僕に図書室にある、何を読めと

仰るんですか？皆も、中学の頃にウチで、日本語に訳されてるのは読んでますから、今更読むものありませんよ。」

と、淡々と説明した。

すかさず光彦は、  
「何か、他に断る理由は必要ですか？」  
歩美も、

「それに、私たち、今までの経験を生かして、新しく部活立ち上げますから。」  
最後に哀が、

「これ以上、私達を勧誘するのは、止めていただけますね？」  
と、極上の笑顔で有無を言わず、頷かせた。

固まった部員達を部室に残し、颯爽と去っていく四人だった。

「上手くいったね！」

「事実しかいってないんですけどね。」

「最後の哀の笑顔でKOだったな。」

「これで、ちよつとは静かになるわね。」

教室に戻り、帰り支度をしながら、話していると、

「あ、私、ちよつと料理部と科学部に行くわ。先に帰ってても良いわよ。」

と哀は言っ、鞆を置いたまま教室から出て行った。

「あゝ、俺、哀を待ってるから、オメーら先帰って良いぞ。」

「いえ、コナン君、サッカー部のことでちよつとお話しが…。」

「ん？何だ？今日は無理だぞ。元太いねーし。っつーか、やるなら、昼休みだな。」

「そうですね。僕も、昼休みがいいと思ってました。そうじゃなくて、人数ですよ。」

「人数？」

「はい。キーパー入れて3人はやっぱりツライと思うんですよ。せめてもう一人……。」

「ああ、確かにな。でも、サッカー部の奴らには頼めねーし。あいづら、わざと負けそうだしな。」

「そ、そうですね。どうしましょう?」

2人が悩んでいると、歩美がおずおずと口を挟んだ。

「あ……あのさ、2人とも……私で良かったら、一緒に戦うよ?」

「……えっ!?!」

2人は、思いがけない言葉に、目を見開いて驚いた。

「だってね、私だって、みんなとサッカーで遊んできたよ。運動神経は自信あるし、15分位で良いなら、フルで動けると思うの。」

「歩美ちゃん、いいのか?相手は男子だよ?」

コナンは、気遣うように聞くが、

「大丈夫!!今までだって、男子と試合してたもん。」

笑顔で言い返す歩美。

「でも、サッカー部だって本気で来るはずですよ!!ケガでもしたらどうするんですか!?!」

心配しすぎて、少し声を荒げてしまった光彦。

「光彦君、大丈夫だよ。それにね、私だって、探偵団の一員だよ!協力させてよ。ね?」

諭すように光彦に言って、最後は、得意のおねだり攻撃。

そう、歩美は、両手を顔の前であわせて、小首を傾げて見上げるようにお願いのポーズをしたのだった。

2人とも、頷いてしまった。

結局は、歩美に弱いのである。

光彦は、惚れた弱み。



コナンは、かわいい妹のおねだりとして。

そして、そのまま、コナン達3人は、サッカー部のいるグラウンドへ行き、サッカー部に、明日の昼休みに、試合をすること、内容として、

? 人数は、キーパー込みで4人(交代は自由)

? 試合時間は15分

? 試合時間内に、先に3点取れば、その場で試合終了

? 探偵団が勝てば、今後一切の勧誘行為は禁止

? サッカー部が勝てば、コナンと光彦は入部する

との条件で、試合の約束を取り付け、教室へと戻っていった。

3人がサッカー部の話しをしている頃、哀はというと、料理部のいる、調理実習室に来ていた。

「こんにちは。部長さん。再三の勧誘のお返事にきました。」

と、哀が無表情でいうと、部長と呼ばれた3年の梶井は、満面の笑顔で歓迎した。

「いらっしやい、灰原さん。良いお返事を持って来てくれたのね！」

「喜んでいるところ申し訳ないんですけど、私、入部しませんよ。習うべきこともありませんし、部活は、皆と新しく立ち上げますので、これ以上の勧誘は止めていただけますか? はっきり申し上げて、

迷惑極まりないです。」

と、一息で言い切り、呆然と立ち尽くす部員達をそのままに、調理実習室を後にした。

そして、科学部のいる科学実験室へと向かい、ドアをノックした。

コンコン

「失礼します。」

「どうぞ。ようこそ……って、灰原さん！！まさか、入部！？」

入ってきた哀を見て、3年で部長の山縣は、喋りながら近づいてきた。

「いえ、これ以上の勧誘はご遠慮願おうと思ひまして、正式に断りにきました。」

「何故！？何がダメなんですか？」

「強いて言わせていただくなら、レベルですね。私の研究論文を読んだんですよ？100%理解できましたか？無理ですよ？高校や大学では習わないようなことも書きましたし。」

「たっ、確かに、僕達には理解できなかったけど、有名大学の教授達が、拳つて誉めてたじゃないか！！そんな人が、何で科学部に入らないなんて言える？」

「理由は先ほど申し上げたでしょう？科学部で、私の研究を進めることは出来ないし、そもそも、理解していない人間と共同で実験しようとは思いませんから。実験のチームは、同レベルの人間が多数いることで、前に進めるのであって、1人が抜きん出していたら、そのチームは、教える人と教わる人に分かれるでしょう？私には、教える気はないので、この関係は成り立ちません。今言ったことは理解できましたよね？」

哀の勢いに、啞然とする山縣と部員達。とりあえず、

「あ、ああ……。」  
と頷いた。

「では、二度と勧誘などをしに、私の前には現れないでいただけま

すね？」

無表情で念を押す哀に、

「はい、すみませんでした。」

と、元気なく応えた。

すると、哀は笑顔で、

「では、失礼しました。」

と言って、実験室をでて、教室へと向かった。

この後、哀への勧誘は一切なくなったのは言うまでもないだろう。

30分程で戻ってきた哀と、コナン達は合流し、帰路についた。

帰り途中、3人は哀に、サッカー部とは、明日の昼休みに試合をすることや、歩美も試合にできることを話した。

撃退く文化部編く（後書き）

あれ？哀ちゃんが最強！？

歩美ちゃんのおねだりは可愛いですよね。

今回は、サッカー部との試合です。

撃退く作戦会議編く（前書き）

ごめんなさい。だいぶ更新が遅れた上に、サッカーの試合まで行き  
着きませんでした。

## 撃退く作戦会議編く

翌朝、いつもの交差点で、いつものように挨拶を交わした5人は、今日の昼休みのサッカー部との試合について話し合い始めた。元太には、昨晚、コナンがメールをして、基本ルールの説明はしてある。

「とりあえず、位置の確認からしておきましょう。」

光彦は、鞆からノートとシャーペンを取り出しながら切り出した。

「ゴールキーパーには、元太。」

「おお！任せとけ！！！」

「センターが俺で、右サイドに歩美ちゃん。」

「私が右サイドね！」

「ああ、で、光彦が左サイド。」

「いつも通りですね。」

「哀は、監督な。相手の分析を頼む。」

「ええ。分かったわ。」

「歩美ちゃん、相手のスタメンは予想できるか？」

コナンの問いかけに、ちょっと考えてから、

「3年でキャプテンの荒木先輩は確実だと思う。ゴールキーパーも、3年の梶井先輩のはず。あとは、3年の日比野先輩と、2年で、元帝丹中サッカー部キャプテンの牛島先輩かな。」

「げっ！牛島先輩！？」

「ヤバいですね。先輩は、僕たちのプレーを知ってますからねえ。」

「でもよお、俺と歩美のことは知らねえだろ？」

「まあ、それはそうか。サッカー部では、俺、本気出してねえしな。」

「そうよ。それに、向こうのデータなら、過去の試合をネットで検

索して、大体揃えたわよ。」

「ああ、昨日遅くまで調べてたのはそれだったのか。」

「あら。気付いてたの？」

「バー口オ、俺が気付かないわけないだろ。いつでもオメエのことを見てるんだからよ。」

少し照れながら見つめ合うコナンと哀に、

「ちよつと2人ともしいい加減話戻してよね。」

と、呆れたように歩美が言った。

はっとして哀は、

「あら、ごめんなさい。大体のプレー傾向ね。荒木キャプテンは、技術的には中の下って感じかしら。パスは右サイドに回すことが多いわね。キャプテンだけあって、視野が広いから、敵味方両方の動きをよく見てるわ。今回は確実にセンターで来るはずよ。1対1は苦手。コナンなら楽にボールを奪えるわ。」

「中の下ねえ。パスさえ回させなきゃ取れるってことが。ディフェンスについては何かあるか？」

コナンは情報を整理しながら、哀に聞く。

「そうね…。ボールを奪つてるとこは見たこと無いわね。ああ、持久力は有るわ。ボールは奪われなくても、マークは外せないかもしれない。」

コレには、光彦が、

「うーん、少し厄介ですね。でも、コナン君のボールコントロールは秀逸ですからね。大丈夫でしょう。」

そこで元太が口を開いた。

「なあ灰原、シュートは何か、決まったコースとかないの？」

「シュートは、殆ど外れるから。狙いとしては、いつも向かって右上。」

「そっか。まあ、とりあえず、いつでも右に跳べるようにしとくか。」

「

「でも、あくまで参考だから。頭に入れておくだけにしなさい。」  
「わかった。」

と、そこで5人は高校に到着し、いったん教室に荷物を置いて、屋上へと向かった。

歩美が話の続きを促すために、

「次は、ゴールキーパーの梶井先輩ね。」

と言い、哀が、

「梶井先輩は、動態視力には優れているけど、瞬発力がそれに追いついてないわね。だから、近いところからのシュートに弱いわ。あと、足下を狙ったシュートも止め辛いみたい。」

「じゃあ、なるべく近くから、足下を狙えば私でもシュート出来るかなあ？」

と聞いてくる歩美に、微笑みながら、

「そうね。いけるかもしれないわ。チャンスがあったら、思いっきり蹴ってみなさい。」

と哀は優しく言った。

「3年の日比野先輩は、たぶん歩美ちゃんの相手になるわ。」

「そうでしょうね。間違いなく、牛島先輩を僕に当ててくるはずですから。」

と光彦が少ししかめ面で言うと、

「まあ、その方が、光彦もやりやすいだろ？先輩の癖は分かっているし。オメエだって、先輩達がいる時は遠慮して本気出してなかったじゃねえか。」

「あはは、気付いてたんですね。遠慮してたの。」

「ああ、いつもの動きと違ってたからな。」

「コナン君には適いませんね。」

と、コナンと光彦が話していると、

「説明続けていいかしら？」



哀はジト目で2人を見る。

「すつ、すみません。」

「ああ、悪かったな。」

と2人は慌てて謝った。

「日比野先輩は、瞬発力に優れているわ。気を付けてないとマークを外されるかもしれない。でも、コントロールは悪いから、歩美ちゃんのスピードがあれば、ボールは奪えるかも。シュートは、キーパーから遠いところを狙う傾向にあるわね。」

「俺は真ん中にいつでも動けるようにしとくな。」

「私は見失わないようにマークしないとだね。で、取ればボール取るよ！」

「歩美ちゃん、無理はしないで下さいね。」

「分かってるよお。光彦君ったら、心配性なんだから。」

歩美と光彦ははにかんで見つめ合っていた。

「イイ感じのそこワリイけどよお、そろそろ予鈴なるぞ。」

と元太が言ったので、5人は教室へと戻った。

次の休み時間は、教室で作戦会議を進めていた。

「牛島先輩は、知ってるの通り、持久力は無いわ。でも、今回は持久力関係ないのよね。とりあえず、注意するとすれば、技術力ね。特に得点力に関しては、他の2人とは比べものにならないわ。」

「ああ、でも、光彦なら止められるはずだ。」

「牛島先輩はテクニクは凄いですけど、ゴールまでのコースを考える時間がありますからね。そこを狙えばいける気がします。」

「考えてる時は足下疎かになるもんなあ。あの人。」

「ふふつ。そこは円谷君に任せるわ。」

「とりあえず、そんな感じかなあ？こっちの作戦は？」

5人は、急に真面目な顔になった。

「コナンを中心に左右へパスを回して、各自シュートのタイミング

を計って。ただそれだけで平気よ。コナン、あまり本気は出さないように。円谷君、あなたは本気出して。歩美ちゃんは瞬発力に自信を持って頑張つて。小嶋君、ゴールはあなたに任せるわよ。絶対に入れさせないで。」

「よし！徹底的に叩きのめすぞ。でも、歩美ちゃんは、無理するなよ。怪我をしちゃあ、元も子もないからな。」

「うん。無理はしないよ。でも、一点は入れるんだから！！」

「俺は、一点も入れさせねえから、安心して攻めるよな！」

「では、僕は先輩に実力の差を見せつけてあげましょう。」

「その意気ね。昼休みが楽しみだわ。情報の修正は任せて。弱点探すから。」

「よし。後は、昼休みを待つだけだな。」

そうして、昼休みまでの残りの授業に集中するのだった。

撃退く作戦会議編く(後書き)

次話こそ試合です！

撃退！サッカー部編（前書き）

やっと書けました。

サッカー好きな方、寛大な心で読んで下さい。

## 撃退くサッカー部編く

昼休み。

5人は、早めに昼食をすませ、ジャージに着替えてグラウンドへと向かった。

アップのため、ゴールにいる元太に向かってシュートの練習や、パス回しの練習をする。

大団体が慣れてきた頃、サッカー部が現れた。

歩美の予想通りのメンバーが来ていた。

5分ほどサッカー部にアップの時間を与え、試合を始めることになった。

「先輩、正々堂々と勝負しましょう。僕たちは負けませんから!!」  
コナンは、4人の先輩達に宣戦布告をした。

荒木キャプテンは、ニヤツと笑い、

「ああ、こつちも負けるわけにいかないからな。」  
と言って握手を交わした。

コイントスの結果、キックオフは探偵団からになった。

サッカー部は、荒木キャプテンを中心に右サイドに日比野先輩、左サイドに牛島先輩、そして、ゴールキーパーは梶井先輩だ。

『。』  
『。』

試合開始のホイッスルが鳴った。

まずは光彦がコナンへボールを送り、攻撃開始！

光彦は左サイドをゴール方面に駆け出した。

その空いたスペースにコナンはボールを蹴りながら向かい、逆サイドの歩美は一度センターラインギリギリまで下がる。そこへ、牛島をかわして光彦が右サイドに走る。

コナンは光彦へパスをし、すかさず空いた左サイドをゴールへと向かう。

歩美は日比野を置き去りに真ん中へ走り込み、光彦からパスを受け、そのまま蹴り進めてゴールキーパーの左足から少し離れたところに思い切りシュートを打ち込んだ。

思いの外速い球に反応が遅れた梶井は、歩美の蹴った球を止められず、開始早々で1失点をしてしまった。

それが、しかも、年下の女子にである。ショックを受けたの言うまでもない。

「きゃ〜！決まっちゃった 哀ちゃん見た！？先制点だよ〜！！」  
とハシヤぐ歩美。

哀は、笑顔で拍手し、

「歩美ちゃん、その調子よ。頑張って！！」

と声をかけた。

「俺たちも負けてらんねえな。」

「はい、頑張りましょう！次はディフェンスですよ。」

と、コナンと光彦の士気も上がる。

ショックから立ち直りきれしていない梶井は、とりあえず、荒木にパスを出した。

「よし！今の1点を取り返すぞ！！」

と声をかけながら、荒木はボールを蹴ってセンターラインまで来た。コナンは荒木をピタリとマークする。ここで、歩美が、日比野に振

り切られ、真ん中に向かって走り込む日比野にボールが渡った。何とか追いついた歩美だったが、やはり、コンパスの差が、すぐに振り切られてしまった。

そのまま、日比野は元太から遠い、右上角を狙ってシュートを撃つ。しかし、それを読んでいた元太にセーブされてしまった。

「くそっ！！」

悔しそうな声がした。

「みんな上がれ！！」

元太は叫びながら、左サイドに上がっていた光彦に思い切りパスをした。

難なく受け止めた光彦は、牛島と1対1でゴールを目指す。

コナン仕込みのボールコントロールで、巧みに牛島を翻弄する。

それをみたコナンは、邪魔をしないように右サイドに寄って場所を空けた。歩美もセンターライン付近で待機している。

流石に、加勢には行けないことを分かっているのか、荒木も、日比野も動けないでいた。

牛島は思った。

『あれ？円谷って、こんなに上手かったか？これじゃあまるで、中学時代の江戸川みたいじゃないか！円谷は、ちよつと上手いけど、周りに埋もれるタイプじゃなかったか？ここまで個人プレーで抜きん出てる奴じゃなかったはずだ。』

光彦は、それに気付いて、不敵に笑って、

「先輩、僕の実力は、あの頃とは違いますよ。今が、全力です。」  
と言って、用は済んだと言わんばかりに、牛島を抜き、ゴールへと向かった。

牛島は、『しまった！』と思い、必死で追いかけて、スライディングで足下のボール目掛けて滑り込むが、楽にかわされた上に、シュートを撃たれてしまった。

光彦の蹴った球は、左に寄って待ち構えていたキーパーの右上を通り抜け、ゴールネットを揺らしたのだった。

「よっし!! 2点目!」

とコナンは光彦とハイタッチをする。

歩美は光彦に抱きついて喜んだ。

「光彦君スゴい!」

「あ、歩美ちゃん、皆さんが見てますよ!」

「おーい、ディフェンスに戻るぞ。」

冷静なコナンの声に、赤面しながら光彦が返事をする。

「はっ、はい! 歩美ちゃん、戻りますよ。」

「うん。」

そんな3人を微笑みながら見守っていた哀だが、急に険しい顔になり、牛島に鋭い視線を向けた。

『マズいわ。牛島先輩のあの目。不穏な気配がする。マークを変えさせようかしら。』

と考えていると、コナンと目があつた。

コナンも牛島の不穏な気配に気付いたらしい。

哀に向かって頷いてみせるコナンに、哀も頷く。

すると、コナンは光彦に向かって行き、

「光彦、荒木先輩についてくれ。何だか、悪い予感がするんだ。」  
と言った。

「え? はあ、いいですけど。」

と答え、荒木先輩へと向かって駆けていった。

荒木は、今度は牛島にパスを出した。

「なあ、江戸川。お前は中学の時、全然本気出してなかったよな?



円谷もなのか？」

と目が完全に据わり、睨みつけるように聞いてきた。

「はい。俺は、本気なんか出しませんよ。昔も…今もね。光彦は、先輩達を立てるのに、力を抜いてただけですよ。」  
と、仕方無さそうに説明した。

少し考え込む牛島の足は、ほぼ止まっていた。

その隙についてコナンはボールを奪いつつ、

「先輩、あなたがそんなだから、光彦が本気を出せなかったんですよ。」

と言って、そのまま、ゴールへと一直線に向かう。

それに気付いた光彦と歩美は、フォロワーのため直走る。

ディフェンス陣は完全に出遅れてしまった。

そして、キック力増強シューズが無くても、十分に強くなった脚力で、キーパーの真正面、足の間を狙ってシュートを撃ち込んだ。

あまりのスピード、そしてパワーに微動だに出来なかったキーパーの後ろでゴールネットが揺れた。

開始から、12分後の出来事だった。

当初のルール通り、時間内に3点先取したので、試合は終了になった。

「先輩方、約束です。今後一切、サッカー部への勧誘は止めてくださいね。」

とコナンは、荒木キャプテンに握手を求めながら言った。

「ああ、約束だ。それは守ろう。みんなにも言うておく。」

「ありがとうございます。」

「牛島先輩、今まで、本気を出さずにいてすみませんでした。」  
光彦は、牛島に向かって頭を下げた。

「いや、江戸川に言われて目が覚めたよ。俺達が弱すぎたんだな。  
気を使わせて悪かった。」

「いえ。では、先輩は、これからもサッカーを頑張ってください。僕  
たちは、探偵を頑張りますから。」  
先ほどの不穏な気配はすっかりと消え、晴れ晴れとした笑顔になっ  
ていた。

最後、お互いに、

「ありがとうございます。」  
と頭を下げて、試合は終了したのである。

その日以降、探偵団への部活の勧誘は無くなった。

撃退！サッカー部編（後書き）

なんか、サッカーのルールとか無視でごめんなさい。  
私にはコレが限界でした。

次は探偵部の活動内容が明らかに！？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7741w/>

---

5人の高校生活

2011年10月22日02時15分発行